ジャコバイトの夢
―ジェーン・バーカーの『イグジリウス』―
Dreams of a Jacobite: A Study of Jane Barker's *Exilius*

河　崎　良　二
Ryoji Kawasaki

Jane Barker (1652-1732) is a female writer of the late 17th and early 18th centuries ignored for nearly two centuries until the feminist movement in the late 20th century threw light on her.

Though a considerable number of studies have been made over the past few years on her contemporary female writers, Aphra Behn and Delariviere Manley, we still have only a few articles on Jane Barker. Yet she is very important in the history of the English Novel, because she is thought to be the first English novelist.

In 1713, six years before Daniel Defoe's *Robinson Crusoe* which have been considered the first English novel, she wrote a small work, *Love Intrigues; or The History of the Amours of Bosvil and Galesia*. In another article of mine, which is already finished and will be published in *Eikoku Shousetsu Kenkyu* in May 2006, I show that it is the first English novel based on her real experiences.

But in this article we are concerned with her first romance, *Exilius; or, the Banish'd Roman* published in 1714, and examine how her autobiographical matters are handled there. Romance is usually thought to be unrealistic, but we want to show that this romance is realistic, and a means to enable her to express her beliefs and experiences.

It was thought some parts of *Exilius* were completed as *Scipina* in 1687. But it was not published because it was thought to be dangerous at that time. England was moving toward the Revolution of 1688, and people forsook King James II and asked William in Holland to take the throne. Barker was a Jacobite and against it. *Scipina* was a romance, but it was written against the current of the times.

Barker, born of an Anglican father and a Catholic mother in 1652, was converted to Catholicism before the Revolution. She was one of the forty thousand people who followed

James II when he fled to Paris at the time of the English Revolution. She stayed there for fifteen years, and returned to England in 1704. But in 1727, she went to Paris again and died there in 1732. Her experiences in Paris as an exiled Jacobite made her revise *Scipina* into *Exilius*, a voluminous work of heroic love which includes nearly twenty characters, and marriages of six pairs of lovers. The stories are so complicated that a lady editor of the romance says that there is no plot.

If she means it is chaotic, she is wrong. As we show in this article, it is closely planned and the episodes are closely related to each other. The author knitted many love stories together with small incidents. When we know that marriage in Jacobite literature is a symbol of legitimate royal inheritance, that is, King James's inheritance, we come to the conclusion that *Exilius* is a work that is based on her experiences after the Revolution, and expresses her dreams as a Jacobite of restoring the reign of the legitimate king.

序

Jane Barkerはフェミニズム批評の高まりの中で再評価された十七世紀後半から十八世紀初頭の女性作家の一人である。最初にバーカーを論じたのはJane Spencerで、彼女は一九八三年に論文"Creating the Woman Writer: The Autobiographical Works of Jane Barker"で、バーカーの*Love Intrigues: or The History of the Amours of Bosvil and Galesia*（以下『ボズヴィルとガレシア』と記す）と*A Patch-Work Screen for the Ladies*（以下『パッチワーク』と記す）、*The Lining of the Patch Work Screen for the Ladies*（以下『続パッチワーク』と記す）の女主人公Galesiaと作者バーカーとの関わりを論じた。簡単にスペンサーの主張をまとめれば、著述は男性のすることだとされていた時代に、バーカーはガレシアというロマンスの人物の名前を採用することによって、「作者が経験した話をロマンスの伝統の中に包み込んだ。」[1]このように自伝をロマンスとして提示することによって、バーカーは彼女自身が求める、「学問や医術や著述を通して自己を確立する」女主人公を描くことができたというものである。(178) このことは不品行な女性作家がその体験に基づいて好色な物語を書くと考えられていた時代にあって、画期的なことであり、バーカーは「女性作家は小説を書くときでも、純潔で、道徳的で、立派であることができるという、徐々に育っていた考えに貢献した。」「この純潔な女性作家への信頼が、次の時代に多くの女性作家が成功と尊敬を勝ち得る土壌を作るのに役立った。」「ガレシア物語は女性の文学的才能を物語の中心的関心にしようとする最初の試みを含んでいる」とスペンサーは考えている。(179)

スペンサーは、その三年後の一九八六年に著書*The Rise of the Woman Novelist*を出版した。それは「小説の成立は中心において、父権性社会の中で許される女性の文学的発言が増大したこ

とと結びついている」ことを論じたものである。[2]その第一部「ヒロインとしての女性小説家」の第二章「三つの自画像」の中で、スペンサーはAphra BehnやDelariviere Manleyとともに、再びバーカーを取り上げ、先の論文と同趣旨の発言をしている。

しかし、バーカーに関する批評は、その後Kathryn Kingが二〇〇〇年に著書*Jane Barker, Exile: A Literary Career 1675-1725*を出版したことで、大きく変わった。キングは一九八三年にジェーン・スペンサーが最初のバーカー論を出した時には、「ほとんどの資料が誤りであった」と断定した。[3]もちろん、一九八三年以後のスペンサーの読みが全て否定されたわけではない。しかしキングの著書は、長年に亘って掘り起こしたバーカーに関する資料をもとに書かれた労作である。バーカーに関する信頼できる資料はキングの著書以外にない以上、私たちは彼女の著書に頼らざるをえない。キングが重視するのは女性作家という側面よりもジャコバイト作家の側面である。

バーカーは一六五二年、ノーサンプトンシャーでイギリス国教会の父とカトリックの母の間に生まれた。一六八〇年代の中頃、三十代前半にイギリス国教会からカトリックに改宗し、一六八九年にジェイムズ二世の後を追ってパリに亡命した。（キング、113）一七〇四年に一旦帰国した後も周囲の国教会信者から離れて生活し、七十五歳で再びフランスに渡り、一七三二年に八十歳でパリで亡くなった。

この経歴を見れば、バーカーの人生においてジャコバイトであったことがいかに重要な位置を占めていたかが分かるだろう。同じことは作品についても言えるだろう。スペンサーが先の著書で述べているように、「自伝的要素がバーカーの作品の中心を占めている。彼女の書くもので自伝的でないものはない」からである。（62）キングもバーカーの作品の「自伝と虚構の自己表現、そしてファンタジーの複合的混交」が称賛されていると述べている。（3）とするなら、ジャコバイトとしての経験が作品の核となっていると考えることができる。バーカーは先ず古代ローマ時代を舞台とするロマンス*Exilius; or, the Banish'd Roman*（以下『イグジリウス』と記す）を書き、次におそらく最初のイギリス小説と言っていい『ボズヴィルとガレシア』を書き、再びロマンスに近い作品『パッチワーク』、『続パッチワーク』を書いた。[4]しかし『ボズヴィルとガレシア』以降の作品では作者と等身大の女性ガレシアが自らの境遇を語る物語が中心で、自伝的要素が基になっていることは容易にわかる。他方『イグジリウス』はスキピアーナ、アジアティクス、イグジリウスなどが語る古代ローマ時代のロマンスであり、ガレシアは第二部第二巻に登場するヌミディアの王女にすぎない。『イグジリウス』が自伝的な作品であるとするなら、ジャコバイトであった経験はロマンスの中でどのように表現されているのだろう。それは、同じ時期に書かれていた小説『ボズヴィルとガレシア』とどのように関わっているのか。さらには、なぜ小説という新しい自己表現の方法を一度は取りながら、それを棄てて再びロマンスに戻ったのか。バーカーの著作についてのこれらの疑問に答えていくことでロマンスから小説がどのようにして生まれ

たかについての答を見いだすことができるかもしれない。しかし、小論で取り上げるには問題が大きすぎるので、『ボズヴィルとガレシア』以降の作品については稿を改めて書くことにして、[5] ここではロマンス『イグジリウス』について、どのように自伝的要素がロマンスとして提示されているのかを中心に考えたい。

I

一六八七年、バーカーが三十五歳のときに「印刷中」と言われた『スキピナ』は、一七一四年に『イグジリウス』として発行された。（キング, 150-51）その前年の一七一三年、バーカー六十一歳の五月には、小説『ボズヴィルとガレシア』が*Love Intrigues*として出版されている。二つの作品はほぼ同じ時期に書かれていたのである。

一六八九年にパリに渡る以前に完成していた『スキピナ』を、バーカーは一六八九年から一七〇四年、三十七歳から五十二歳までの間に、亡命中のジェームズ二世とその追随者が住むサンジェルマンにおいて、また一七〇四年に帰国した後もイギリスで十年間加筆し、『スキピナ』から実に二十七年後に『イグジリウス』として出版したのである。題名の変化が示しているように、長い年月に亘る加筆のために、最初の構想とは異なったものになったと思われるが、作品の完成度は高くなっている。とりわけ多くの人物の関わりを細部に至るまで緊密に構成しているところに、この作家の力量を伺うことができる。先ず、『イグジリウス』の基となった『スキピナ』の出版と内容に関する事柄を整理しておこう。

一六八七年に『スキピナ』は印刷中であったと書いたが、なぜそれが出版されなかったのかは分かっていない。印刷中という発表は、その年に、友人で印刷業者のBenjamin Crayleがバーカーの詩集*Poetical Recreations*を出版したとき（ただし詩集の表紙の日付は一六八八年、（キング, xiii））その推薦の詩で言及していたのである。（キング, 151）バーカーはオックスフォード大学の学生だった兄の友人の紹介でケンブリッジ大学の詩のサークルに入っており、クレイルもそのメンバーであった。（キング, 31）詩集第一部はバーカーの詩、第二部はその他のメンバーの詩だが、クレイルが合本にしたもので、第一部と第二部の関わりはほとんどない、とキングは述べている。(31)

五十あまりの詩の幾つかが「異性関係を拒絶したり、拒否したりして」、（キング, 54）バーカーが「結婚生活に代わる本当の独身生活を打ち立てることに関心があった」ことを示しているが、（キング, 63）大半が社交的な詩で、「ほぼ半分の詩は友人、知人への親しみのこもった書簡である」と言われている。（キング, 30）これはキングが指摘しているように、小説『ボズヴィルとガレシア』や最後のロマンス『パッチワーク』で描かれている「少女時代の淋しい生涯とは違う。」（キング, 54）このことは彼女の散文作品を扱うときに留意しなければならない。

キングによれば、『スキピナ』もまたケンブリッジの詩のサークルと深く関わっていたと言う。

『スキピナ』が手書きの状態で同人たちに読まれていただけでなく、「同人の内の二人はロマンス中の登場人物と同じ名前（イグジリウスとフィデリウス）で書いていた」のである。(151) さらに、「学生たちはバーカーがストレフォン／ボズヴィル（『イグジリウス』ではボッカスと呼ばれている）に夢中であったことをよく知っていただろう。信用できない求婚者で、その不実な行為は明らかにこのサークルの中でやり取りされた詩の主題であった」と述べている。(151-52)

先に述べたように、『スキピナ』の出版が中止された理由ははっきりしていないが、内容が当時の状況に相応しくなかったためだと考えられる。一六八七年と言えば、名誉革命の前年である。当時、ジェームズのカトリック政策に脅威を感じていた「イングランド国民の大半は、ジェイムズは余命いくばくもなく、彼の娘メアリーが手遅れにならないうちに後を継ぐだろうという期待において、一致していた。」[6]翌一六八八年には、「ウィッグ党とトーリ党が連合してオレンジ公ウィリアムと交渉を開き、六月三十日に明確な招請状が指導的な貴族の一団によって送られ、ジェームズにそむく反乱に積極的な支援を約束した」のである。[7]『スキピナ』はこの時代の流れに反していたのである。

『イグジリウス』の中に組み込まれ、改変されてしまったとはいえ、明らかに他の物語と異質な第一部第四巻は最初に構想された『スキピナ』の一部であると思われる。キングも、この章のエジプトのエピソード、エジプト王妃の歴史を、一六八七年までに完成していた部分としている。(キング. 151, n. 11)

第一部第四巻のエジプト王妃の歴史には、明らかに政治的な言及がなされている。罷免された親衛隊長ピソは兄である神官長に、王家はエジプトの昔の敵であり、奴隷であったユダヤ人の教えに傾いており、王は法を変えるつもりなのだと言う。そこで神官長は下級の神官を使い、人々の心に反乱の種を撒いた。ピソは宮廷や町にスパイを置き、さらに田舎に行って反乱の準備をした。一方、王は楽しみに、王妃は信仰に熱中して、神が託した仕事を忘れていた。(128)

ここで言われているユダヤ教が当時のイギリスにおけるカトリックを意味していることは容易に分かる。つまり第一部第四巻では、カトリックの側から、当時のイギリスの政治への言及がなされているのだ。キングが述べているように、ここでのエピソードは「追放の危機（一六七八年～八三年)、モンマスの反乱（一六八五年）を含んでいる」のだ。(キング. 151, n. 11)

同じような政治的言及は第二部にもある。キングはそれらを「文化的誤伝（ii. 41)、王子は偽者だという誹謗（ii. 55-56)、スキピオ家の勝利の予言（ii. 60-61)、司祭による詐欺、ペテンの厳しい反省（ii. 89-90)」であると言い、「この材料のいくつかはサンジェルマンか、もっと後に書かれたかもしれない」と述べている。(キング. 151, n. 11) しかし、これらのエピソードはエジプト王妃の歴史と同様に『スキピナ』の一部であったと考える方が自然だろう。ただし最後の二つは、司祭が国王に予言する際のからくりへの言及である。神を幻視するピューリタンへの揶揄であるかもしれないが、それほど重要な指摘を含んではいないので、ここでは最初の三つのエピソ

ードについて、それらが何を意図したものかを考えたい。

三つのエピソード全てが第二部第二巻、スキピアーナ（スキピナ）の兄アジアティクスの語るヌミディアの王女ガレシアの物語に出てくる話である。この話は二つの三角関係からなっている。一つは、ガレシアとアジアティクスの関係を疑っていたガレシアの婚約者モーリタニアの王子ボッカスが、二人が話しているのに嫉妬し、剣を抜いてアジアティクスに切りつけるが、仲裁に入ったガレシアが、反省しない王子をアジアティクスの剣で殺してしまう、という話である。（物語は、実は王子は生きていて、様子を窺っているというように続く。ちなみに、バーカーの小説『ボズヴィルとガレシア』はガレシアとボズヴィル（ボッカス）の恋の話である。）

もう一つの三角関係は、アジアティクスと王妃と王女の関係である。アジアティクスに恋している王妃は激情の虜になっていて、モーリタニアの王がアジアティクスの身柄を引き渡すように要求すると、王子と王女ガレシアを人質として差しだそうとし、さらにはアジアティクスと王女ガレシアの関係に嫉妬し、王女を絞首刑にしようとする。

キングが挙げている政治的言及に戻ると、第一の「文化的誤伝」とは、ガレシア、ボッカス、王妃の言動が相手に、また彼らの噂を聞く人々に正しく伝わらないことを述べたものである。ここには、人間は「自分が心に描くことを信じ、噂で聞いたことを知っていると考え、誤った知識、誤った情報、誤った想像で行動するものだ」というバーカーの苦い現実認識がある。（II. 41）これは、ジェームズの言動を正しく理解しようとしない人々への批判と考えていいだろう。

第二の「王子は偽者だという誹謗」とは、ヌミディアの人々は王子ボッカスが亡くなったと信じていて、現れたボッカス王子のことを他の王子を出し抜くための策略だと考えたことを指す。他の王子達がこれにつけ込んだために、人々はすぐに信じた。「民衆というのは、これほど馬鹿げたことでないとしても、高位の者たちの力を削ぐことなら、どんな考えでも受け入れるものだ」という、（II. 56）これも当時の人々への批判である。

「スキピオ家の勝利の予言」は、モーリタニアを離れ、アトラス山に向かったアジアティクスが、洞窟に近づいた時、中から聞こえてきた霊感を受けた女の、詩の形で語られた言葉である。「ローマが囚われの状態に陥るまで／スキピオという家が永続するように。／。。。元老院と平民と、三頭政治との間に不協和音が出きた後では／だがこの混乱から比類ない力と価値を持った皇帝が現れ／その治世で戦の騒音は止むだろう。」（II. 60-61）言うまでもなく、スチュアート家の王によるイギリス統治の夢を語ったものである。

このように一六八七年に印刷中と言われていた『スキピナ』はエジプトやヌミディアの王妃や王女の恋に、捕らえられ、奴隷として連れて来られたローマ人の娘スキピナとその兄アジアティクスが絡まるロマンスであったと考えられる。もちろん単なるロマンスではなく、そこには王家の正当な継承者の問題や、臣下の裏切り、人民の反乱が絡まっている。それは当時の国王ジェームズに対する反乱を支持していた政治家や民衆へのジャコバイトとしての批判なのである。ジャ

コバイトとしての経験はこのようにしてロマンスの中に組み込まれたのである。

『イグジリウス』では、スキピアーナが語るのは第一部第三巻と第五巻であり、エジプトの宮廷の話は第一部第四巻でイグジリウスによって語られる。また、ヌミディアの王女の話はスキピアーナの兄アジアティクスによって第二部第二巻で語られる。スキピオ家の二人の兄妹が異国で経験する恋の物語『スキピナ』は、作者自身のフランスへの亡命、サンジェルマンのジェームズ二世の宮廷での生活、帰国、帰国後の孤立という二十七年間の経験の間に、より複雑で大きな物語に書き換えられたのである。このときエジプトの宮廷の話がアジアティクスではなくイグジリウスによって語られるといった小さな変化だけでなく、もっと根本的な変化があったと思われる。なぜなら、イグジリウスという言葉が亡命を意味しているように、ジェームズ二世の亡命前に書かれた『スキピナ』はフランスへの亡命後を中心に『イグジリウス』へと書き換えられたと考えられるからだ。次に、ロマンス『イグジリウス』とはどのような物語なのかを見てみよう。

II

『イグジリウス』のロマンスとしての特質は、先ず登場人物がローマの貴族であり、主題が愛の誓い、親への義務、誠実、名誉などであるところに表れている。プブリウス・スキピオというローマの元老院の大物政治家が友人である元老院の大物政治家カツルスの追放に抗議して田舎に隠棲する。（これらの名前から推測できるのは、作者が古代ローマで第二次ポエニ戦争以後大きな権力を持つコルネリウス氏族をモデルとしていることである。カツルスは当時の執政官の名である。）そのスキピオの田舎の家には姪のクレリアが一緒に暮らしている。クレリアの恋人マーセルスは許嫁がいながらクレリアに求愛した。父ファビウスは二人の恋に反対し、クレリアを伯父のいる田舎に送ったのである。クレリアは後を追ってきたマーセルスと会い、再び愛を確信するが、近くに住んでいる未亡人からマーセルスが言い寄ってきたと聞き、彼に会わない決心をする。そのクレリアのところへ、長く行方不明であったスキピオの娘、従姉妹のスキピアーナが軍人の姿で登場する。二人はお互いに別れていた間に経験した愛と冒険の話をする。一方マーセルスは海岸の近くで一人の女と二人の男に会う。ローマの貴族だが悪人であるターピウスの娘クラリンシアと、追放されたカツルスの息子イグジリウス、そしてローマ人だがアフリカで奴隷として生活していたイスメヌスである。物語の最後で、イスメヌスは、若い頃にターピウスと同様にローマで放蕩な生活をしていたメコスにさらわれた、スキピオの次男であることが分かる。

物語はこれら六人の愛と冒険、つまりクレリアとマーセルス、スキピアーナとイグジリウス、クラリンシアとスキピオの長男アジアティクス（ライサンダーとも名乗る）、最後にカツルスの娘と判明するコーディアラとイスメヌスの、四組の恋が成就するまでの物語が中心になっている。それにクレリアの兄ファビウスとスキピオの友人ルクルスの娘ジェメラの恋、ターピウスとアスベラの息子ヴァレリウスと、メコスの娘アルテミサの恋、伊達男クローディウスの恋、さらには

イスメヌスが語るアフリカのアミルカーの息子ハンニバルと娘エミリアの恋、またイグジリウスが語るエジプトの王と王妃、王女の恋、アジアティクスが語るヌミディアの王女ガレシアとモーリタニアの王子の恋、さらにヌミディアの王妃の恋の物語が加わって、錯綜し、ほとんどプロットが掴めなくなっている。

一九七三年版の『イグジリウス』に序文を書いているJosephine Griederは、「構成（そして真実らしさ）は目的の犠牲になっている。というのはプロット自体がないからだ」と述べている。[8] その通りだが、作者にもプロットが錯綜していることは分かっていた。バーカーは「前書き」で「これはロマンスでヒストリーではないので、読者はヒストリーの部分について正確であることを期待しないだろう」と書いている。（Pref. 6）つまり時間的な流れを重視していないために、プロットが錯綜しているのだ。これもまたロマンスの特徴である。

ではなぜロマンスでは時間が軽視されるのだろう。野島秀勝氏はその著『近代文学の虚実ーロマンス・悲劇・道化の死』で、大まかに言って、中世と現代の違いを空間化（外在化）と時間化（内在化）としているが、そのことはバーカーの作品を考える糸口を提供しているように思える。

> アレゴリー、パーソニフィケイションとは、一言でいえば、時間（人間意識＝「非物質的なもの」「内」）を空間化する手立てに他ならず、空間化（外在化）によって時間の意味を明確に把らえようとする工夫であったといえます。そしてこの空間化をより容易にしたのが「偉大なる存在の絆」が保証する「空間」であったことは断るまでもないことでしょう。これと関連する問題ですが、アレゴリーが全く解消し、また最も忌み嫌われる現代が「時間」によるオブセッションの時代であるという事実は大変意味深いものがあるように思われます。左様、二十世紀は先ず固体（＝空間）の破壊、実体間の障壁（ものの明確な輪郭）の除去、つまり一切を意識の「時間」の上に転位還元することから始ったことは周知の通りです。[9]

「偉大な存在の絆」とは「現実存在の『本質的多様性』（=discordia）と神の『統一』（=concordia）とのいわば'concordia discors'をめざす意識の想像力が描き了えた世界の存在地図」である。（野島、24）絶対的な神への信仰が揺らいできた中世から近世への移行期に、神への懐疑とともに、現実存在の本質的多様性がバラバラなものとして孤立していったのは当然の帰結であり、そこにはもはやアレゴリーは成立すらしないのだ。しかし、一七三〇年、七十八歳の八月十四日にバーカーは、二十九年前に没したジェームズの血を浸したハンカチに言及し、「ジャコバイトの貴婦人、おそらくマザー・ルーシー・テレサ・ジョゼフ、レディ・ニススデイルの妹に、胸のガンがジェイムズ二世の血によって治ったと手紙を書」いた。（キング, xiv）老いてなお熱烈なジャコバイトであったバーカーの意識の中では、神の世界と現実とが繋がっていたはずである。野島氏が言うように、ロマンスの世界はそのような存在の絆を基盤にして展開される世界な

のである。後にバーカーは『パッチワーク』、『続パッチワーク』を書くのだが、そこでもバーカーはパッチワークによって種々のエピソードを繋ぎ、物語を空間化している。バーカーがジャコバイトであるということの文学的な意味は、彼女が本質的には空間の作家であり、時間の作家ではないことにある。

『イグジリウス』はそのことを如実に示している。物語は時間順に、つまり緊密な因果関係に基づいて整理されてはいない。その代わりに、舞台をイタリアの田舎、アフリカ、エジプト、モーリタニア、シシリーへと移動させ、空間化しているのだ。それはまさに物語絵巻の世界である。

登場人物の成長、あるいは性格の変化についても、時間が重要な要素でないために、ほとんど問題にされていない。悪人の改心は時間を追って描かれるのではなく、突然に、あるいは物語の必要上、便宜的になされている。その叙述には彼らの改心を信じることができるだけの時間的経過が考慮されていない。バーカーが「前書き」で「これはロマンスでヒストリーではない」と書いているのは、時間的な変化を重視した叙述ではないという意味なのだ。

では『イグジリウス』は単なるエピソードの寄せ集めであり、混沌とした物語なのか。そうではない。錯綜しているが、物語全体は細かなエピソードによって緊密に関連づけられている。例えば、第二部第一巻でコーディアラは男の服装を見つけ、以後男に変装する。この服は第二部第二巻でアジアティクスが語る話の中で、彼の従者フィデリウスが海に飛び込むときに脱いだ服であることが分かる。また第一部第二巻でライサンダー（つまりアジアティクス）はクラリンシアを襲った男、実は彼女の父タービウス、を刺す。第一部第三巻ではアジアティクスが殺されたという知らせがフィデリウスからスキピアーナに伝えられる。それが第二部第二巻で、アジアティクス自身によって、タービウスを刺した後自分のマントを死体に被せたのをフィデリウスが間違えたことが明かされるし、第二部第五巻では、タービウスは刺されたが、一命を取り留めたことが彼自身によって報告される。このように、物語は複雑で錯綜しているように見えるが、エピソードによって緊密に結びつけられているのだ。そのことはイスメヌスがスキピオの息子であり、コーディアラがスキピオの友人カツルスの娘であり、またメコスの娘がスキピオの妻に助けられて家庭教師となっていること、あるいはアジアティクスがライサンダーであり、スキピアーナはエジプトではイグジリウスの妹としてイグジリアと名乗るなどを見れば分かる。つまり『イグジリウス』は、先に引用した野島氏の言葉で言えば、「現実存在の『本質的多様性』と神の『統一』」が実現された物語なのである。

では、このように緊密な構成によって一体バーカーは何を書こうとしていたのかを次に考えたい。

III

作者による「前書き」に、執筆時にバーカーが何を考えていたかを読み取ることができる言葉

がある。「この時代に洪水のように溢れている放蕩」という批判と、（Pref. 1）「愛は幸福な結婚を作るのにどんなに適切な要素であることか」という主張である。（Pref. 2）この「前書き」に表れた放蕩と愛の対立が物語の中心として意図されたものだろう。「前書き」の続きを見よう。

美徳と名誉によって幸福な結婚を目指す人々は、ほとんど考えなくても、幸福な結婚が英雄的な愛を通っていくところ、及びその周辺にあることが分かる。それで（一般に、この美徳の感情を扱う）ロマンスは無益なものとして捨てられてはならないのだ。

第二に、ロマンスを研究することで若い読者は理解力を開き、本当の価値と表面的な外見とを区別することができる。シーザーやスキピオのような人物を作るのはレースのついたコートでも大きな鬘でもなく、完全なヒロインを作るのは化粧道具ではなく、美徳と名誉であることが見分けられるようになる。ここから次のように結論づけてもいいだろう。若い人たちが運命の難破を経験するのは、多くはこの区別をする手助けとなるものが欠けているからだ、と。（Pref. 2-3）

この「美徳と名誉による幸福な結婚」という考えは著者バーカーの、当時の時代に対する基本的な態度を表明したものであり、同時に作品のモチーフでもあると考えていいだろう。この作品に英雄や完全な女主人公と共に、多くの表面的な価値に惑わされた若者が登場するのはそれらが欠如した場合を示すためである。いや若者だけでなく、タービウスのように娘を強姦しようとする父親まで登場する。ただし著者自身が「これはロマンスでヒストリーではない」と述べているように、物語は本当らしさを追求してはいない。その極端な例は、第二部第三巻の、伊達男クローディウスのために身を落とし、海の怪物サイレンの妻となったローマの裕福な市民の娘である。ここには「放蕩と親への不服従」に対する罰が意図されているが、海の怪物と暮らすという荒唐無稽な話が、当時どれほど説得力を持っていたかは疑問である。

「前書き」でもう一つ重要なのは、「第一に、著者はこれを書いた時、確かに恋をしていた。それで、情熱は正しく描かれていると思っている」という言葉である。（Pref. 4）これは「原稿を読んでくれた人の言葉を敢えて使った」ものだと書かれている。（Pref. 4）原稿を読んでくれた人の言葉をそのまま使ったということは、そこで言われているように、著者自身が恋する者の情熱を正しく描いているという自信があったからだろう。しかし、自らの情熱を客観化しながら「正確に」描くということは、ロマンスの枠を超えることにならないのだろうか。ガレシアの恋する悩みや苦しみを正確に描こうとした次の作品『ボズヴィルとガレシア』がロマンスではなく小説になっているのは、正確に描こうとすることが時間と関わってくるからである。では、ロマンス『イグジリウス』ではそれはどのような影響を与えているのだろうか。

『イグジリウス』では、既に述べたように時間はあまり考慮されていない。しかし恋の情熱を

正確に描こうとする姿勢は『イグジリウス』を小説的な要素を持ったロマンスに変質させている。例えば、次のような特徴が挙げられる。会話による直接話法や、決疑論的な二者選択の状況、あるいはジレンマが多く用いられていること。こういう提示の仕方は現実感があり、小説に近づいていく。もちろん素朴なリアリズムだが、それでも人物はもはやそれまでのロマンスのように善悪のはっきりした人物でいることができず、愛に悩み、逡巡する現実の人間を思わせる。その結果、もはや超人的な英雄は存在しない。

女主人公と言えるスキピアーナが物語の終り近くまで結婚を望んでいないことも大きな特徴である。これは文学、あるいは専門職で生きようとした作者の考えの反映だろう。

政治的色彩が濃いこともこの物語の特徴である。既に述べたように、イグジリウスというこの作品の題名は国外追放、亡命、亡命者を想像させる。そしてこの時期の亡命者とはフランスに亡命しているジェイムズ二世、あるいはその家臣を暗示していると考えられる。作品の舞台が腐敗したローマを離れた田舎であること、出版が一七一五年のジャコバイトの反乱の前年であることも、この作品が政治的な意味を持った作品であることを物語っている。この傾向はバーカー後期の作品にも見られる。『パッチワーク』が出版されたのは一七二三年六月で、それは「アタベリー司教が亡命したのと同じ月であり、ジャコバイトの陰謀家クリストファー・レイヤーが絞首刑になって一ヶ月後である。」（キング, 160）それゆえ、『パッチワーク』は「ジャコバイトの政治的陰謀が失敗に終わったことへの挽歌として、その続編『続パッチワーク』は敗北の時期のジャコバイトのジレンマを探るものと見ることができる」とキングは述べている。（キング, 161）

しかし、ここに述べた小説に近い特徴や、アレゴリーとして提示された当時の政治状況がロマンスの枠を破っているわけではない。『イグジリウス』が六組の結婚（アジアティクスとクラリンシア、スキピアーナとイグジリウス、イスメヌス（アフリカヌス）とコーディアラ、ファビウスとジェメラ、マーセルスとクレリア、改心したクローディウスと未亡人リビディニア）によって終るのはまさにロマンスであることを示している。ただ、それは単なる純粋な愛の物語ではないということだ。では、『イグジリウス』における愛や結婚は何を意図しているのだろう。

キングは先の引用に続いて、『パッチワーク』とその続編について、「ガレシアの実生活の物語の重要な筋である求愛のプロットは今日ではほとんどわからないが、同時代人にとっては政治的な含みがあるものだっただろう」と述べ、（161）「政治的な含み」については、結婚がジャコバイトが望んでいた政治的正当性の象徴として、強姦がそれを破るものの象徴として使われていたと指摘している。（161-62）それゆえ、『パッチワーク』とその続編は失われた恋人がもはや取り返しがつかなくなった状況でのジャコバイトの反応を探るものということになる。（キング、162）この考えは一七一四年に出版された『イグジリウス』にも当てはめることができるだろう。物語の最後に、追放されていたカツルスが帰還し、スキピオ家を中心とした国家の再興がなされることが六組の結婚によって暗示されているのは、正当な王による継承を求めるジャコバイトとして

の夢を描いたものということになる。ただ問題は、それが単なる夢を描いたものでないということだ。カツルスの帰還は出版当時の政治的動きと繋がっているのだ。

キングは、『スキピナ』が三十年後に新しいタイトルで再浮上したことを示す証拠として、週三回発行の新聞*The Post Boy*の一七一四年八月十四日号を取り上げている。「次の木曜にこぎれいなポケット版で、新しい二部のロマンス『イグジリウス、あるいは追放されたローマ人』が出る。」「『イグジリウス』はハノーヴァー家による継承について人々の間に不安が広がっていた状況でついに出た。時宜を得た、政治的な意味合いを持った題名を備えて、変わらぬ愛と追放されたローマ人の、この高邁な物語は、王政復古期にまで遡り、スチュアート朝の別の危機への反応として始まった同人誌の作品だが、（ある意味で、不注意であるとしても）非常にジャコバイト色の濃い作品として出たのである。」（152）

キングはこの「時宜を得た、政治的な意味合い」が何を指すのかをはっきり述べていない。私たちに残された手がかりは、一六八七年に『スキピナ』の出版が取りやめになった後、どのような変化があったのかを知ることである。既に述べたように、『スキピナ』は王家の正当な継承者の問題を扱っていたことに注意する必要がある。その意味で注目しなければならないのは、一六八八年六月十日にジェームズの子、老僭王ジェームズ・フランシス・エドワード・スチュアートが生まれたことと、同年十二月、ウィリアムの侵攻によってジェームズ二世は再びフランスに亡命せざるをえなかったことである。バーカーは一六八九年にフランスに亡命した後、一七〇一年、四十九歳のとき、パリ、サンジェルマンのジェームズの宮廷で、ウェールズ皇太子ジェームズ・フランシス・エドワードに元旦に、'Poems Referring to the times'（「時局に関する詩」）の手稿を献呈している。（キング、122）おそらくこの頃から、ジェームズ二世の子をイグジリウスとして物語の中心において、『スキピオ』を書き直そうとする構想が生まれたのではないだろうか。亡命したジェームズ二世はイグジリウスの父カツルスとなる。物語の終りでカツルスが帰国することによって全てが解決するのは、バーカーが再びジェームズ二世の即位によるスチュアート体制を望んでいたことを示している。もちろん、現実にはジェームズ二世は一七〇一年に没している。つまりカツルスの帰国によるローマの回復とはカツルスの子イグジリウス、すなわち老僭王の即位によるイギリスの回復を求めるバーカーの夢を語ったものとなる。しかしそれは単なる夢ではない。なぜなら、『イグジリウス』が出版された翌一七一五年には、老僭王は一七〇八年に続いて二度目の反乱を起こすからである。

『イグジリウス』は当時のジャコバイトが使用していた結婚と強姦という象徴を使って書かれたロマンスである。具体的にはそれらはジャコバイトに反対する勢力の放蕩、監禁、強姦といった行為に対して、ジャコバイトの美徳、名誉、愛、そして英雄的行為を対置させて作られている。プロットが錯綜して、混乱しているように見えるのは、彼らが置かれた状況を象徴するものだろう。しかし、それは既に述べたように緊密に結び合わされていた。『イグジリウス』はジャコバ

イトであった作者バーカーが、厳しい亡命生活と帰国後の孤独な生活の中で持ち続けた政治的陰謀の夢を、混沌とした愛の物語に隠蔽して描いたものなのである。

注

1）Jane Spencer. 'Creating the Woman Writer: The Autobiographical Works of Jane Barker.' *Tulsa Studies in Women's Literature 2.* 1983. (165-81) 167.

2）Jane Spencer. *The Rise of the Woman Novelist: From Aphra Behn to Jane Austen.* Oxford: Basil Blackwell, 1986. ix.

3）Kathryn King. *Jane Barker, Exile: A Literary Career 1675-1725.* Oxford: Clarendon Press, 2000. 10.

4）テキストはJane Barker. *Exilius; or, the Banish'd Roman.* 2 vols. New York: Garland Publishing, Inc., 1973.を使用した。以下『イグジリウス』の引用は全てこの版により、頁数を引用文の末尾に示す。なお*Love Intrigues: or The History of the Amours of Bosvil and Galesia, A Patch-Work Screen for the Ladies, The Lining of the Patch Work Screen for the Ladies*については*The Galesia Trilogy and Selected Manuscript Poems of Jane Barker.* Ed. Carol Shiner Wilson. New York: Oxford UP, 1997.を使用した。

5）拙論「最初のイギリス小説：ジェーン・バーカーの『ボズヴィルとガレシア』」、『英国小説研究第22冊』英潮社、2006, 5. (刊行予定)

6）G. M. トレヴェリアン著、大野真弓監訳 『イギリス史２』 みすず書房、1974. 195.

7）A. L. モートン著、鈴木亮他訳『イングランド人民の歴史』 未来社、1972. 239.

8）Josephine Grieder. Preface. *Exilius; or, the Banish'd Roman.* By Barker. 6.

9）野島秀勝『近代文学の虚実－ロマンス・悲劇・道化の死』 南雲堂、1971. 31.